

『失われた時を求めて』にみる
サロン空間への導入記述の分析

正会員 ○ 岡田貴行*
同 渋谷佳克**
同 若山 滋***

【序文】「サロン」は、17世紀のフランスでその基盤を形成し、18世紀には成熟期を迎え、19世紀にはその基盤が貴族層から市民層(ブルジョワジー)に移りながらも、今世紀初頭に至るまでフランスの文化活動に大きく貢献してきた。

今世紀最大の小説といわれる『失われた時を求めて』は、作者の多くのサロン体験を背景にしており、サロン空間とそこに訪れる人々の意識の空間を、他の空間との隠喩的な比較によってきわめて詳細鮮明に描き出している。本研究では、この作品から、その時代の人々のサロンという空間の意識を評価し、また、人々がサロンに集まる導入過程における空間認識を見ていくことにより、文学に記述された文化的生活の空間認識構造を明らかにすることを目的としている。

【研究対象及び研究方法】20世紀初頭に著されたM・ブルーストの『失われた時を求めて』(井上究一郎訳筑摩書房)を研究対象とし、その記述内で人々がサロンへ向かう描写及びその先のサロンの描写がされている第7巻のp.27～p.226の記述を扱い、以下の考察を行う。

1:サロン内の『登場人物』、『話題』、『話題の中の用語』を抽出し、サロンの空間を評価する。

2:サロンへ向かう場面での主体の認識した空間を『単一場面』と定義して全て抽出し、それらの『単一場面』をある一つの意味をなす最小文節(『文章ブロック』)で細分化し、文章ごとに考察を行い、それぞれの主体の意識動線、空間の認識構造、それらをまとめた空間の認識領域を図化する。

【サロンの空間】図1にサロンの空間構成図を示す。図1よりサロンには晩餐会を名目として「侯爵」、「医師」、「ヴァイオリン奏者」、「ノルウェーの哲学者」など職業、国を問わず、高貴で名声のある知識人が訪問した。彼等の間では、「人物」「自然風景」「言語学」など様々なジャンルの会話がされ、特に「人物」の噂話が多く、自他の社会的地位を気にしていたと思われる。「ホーエンツォレルン家」「サヴォア」「トルストイ主義」などの言語からサロンが自分の知識の豊富さを表現する、または知識を習得する空間であったと言える。

【空間の認識特性】作品における主体の意識動線と空間の認識構造を図化し(図2,3,4,5)、個々の空間の認識特性及びそれらをまとめた空間の認識領域(図6)について考察する。

図2から図5のそれぞれの空間の認識特性に着目すると、以下のように7種の特性が確認できた。図2より、過去の同様な空間との照らし合わせ(A)、互いに相容れない空間との照らし合わせ(B)、さらには空間ではなく物同士の比較(C)による認識特性が見られた。図3では、まずある空間を認識した後、それを念頭に置きながら、その空間自体に潜んでいる情報ではなく、それに密接に関わっている周辺の情報捉えて付加することで、空間を再認識し(D)、また図4では、捉える対象の規模を徐々に大きくし、それらの積み重ねで一つの空間を把握する(E)。図5では、「視覚」と併せて「聴覚」によって空間が認識されていて、そこには二つの認識特性が見られた。一つは、過去に認識した「音」の記憶と認識対象の「音」が重なることでその空間を認識する(F)。もう一つは、「波の音の響き」という形の捉えられないものから「海」、さらには「空」をも認識する。つまり、認識の幅を広げているのである(G)。

次に、図2から図5で見られた共通の認識構造をまとめて図6にし、3つの観点から考察した。1.独立した個々の空間に着目すると、そこに潜む情報(図中の*印)を捉え、その集積で空間を創り上げる事が分かる。2.図全体に着目すると、1での過程で創り上げた空間を念頭に置きながら他のまたは同じ空間を認識した時、そこに潜む新しい情報を意識の中で重ね合わせながら新しい空間

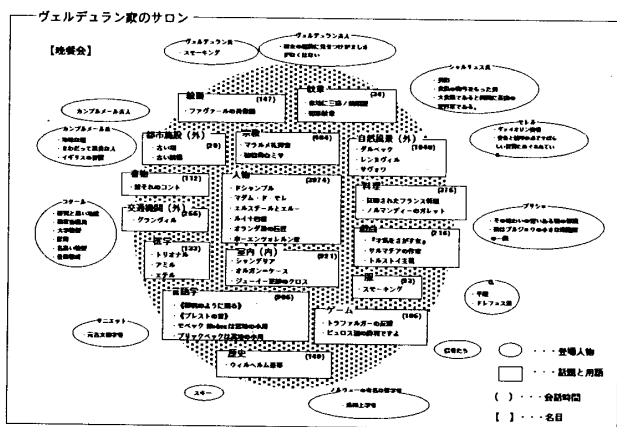


図1 サロンの空間構成図

The analysis of the introductiional description to a saloon in a "A la recherche du temps perdu"

OKADA Takayuki, SHIBUYA Yoshikatsu, WAKAYAMA Shigeru

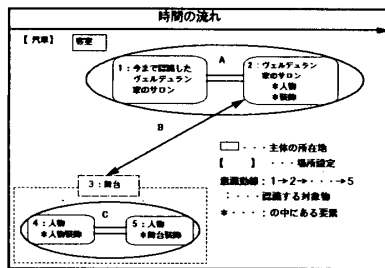


図2 [CASE1]

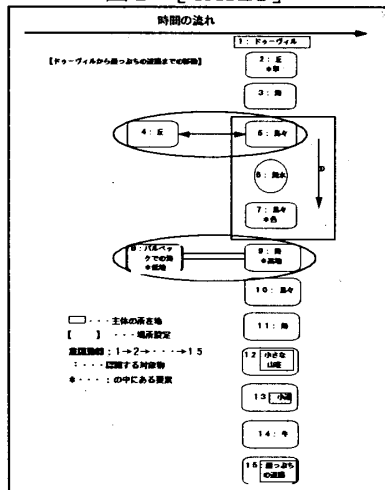


図3 [CASE2]

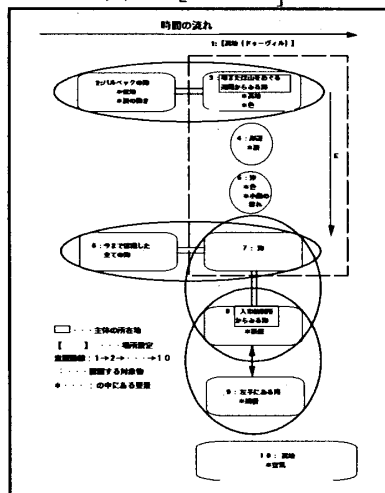


図4 [CASE3]

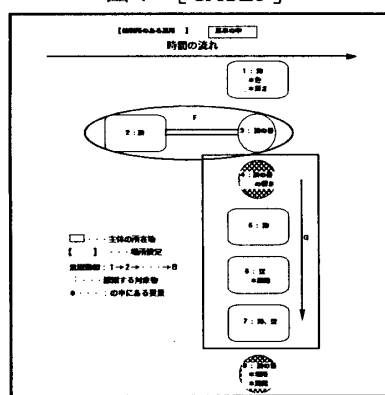


図5 [CASE4]

を創り上げる。その過程の繰り返しで空間の認識領域は広がる。また、まず「視覚」で空間を認識した後、「回想」で空間の認識領域が広がったり、「聴覚」でそれが広がったりする。3.個々の空間の認識特性に着目すると、図2から図5で見られた認識構造が連続的に繋がり、組み合わせることで認識領域は広がる。ここでは実際に捉える空間の認識プロセス、その空間を基にした意識空間の拡張手段を明らかにした。

【結論】『失われた時を求めて』は、「外形的特徴のはっきりしない話者＝「私」の生涯の回想記の体裁をとって」¹⁾おり、青年期からサロンに出入りして、社交生活に熱中した作者自身の記憶を辿っている。作者にとって社交生活は人間観察の場であり、その作者の経験がサロンに集う人物の意識の深層にわけいった描写に現れていると思われる。小説中でサロン空間は、知識人が集まる晩餐会を名目として、表面上は和気藹々と様々な会話がされていたが、個々に於いては自他の社会的立場を確認し、知識をひけらかし、情報を得る空間であり、このようなサロンという空間の存続によって、上流社会の力も保持されていたと思われる。

そこに訪れる知識人を介してサロンへの導入過程の空間をどの様に捉えていたかを考察した結果以下のことを導き出した。

文化的な生活の中で、人が建築物を見た時、そこにある物（窓、扉）、情報（模様、高さ）などを視覚的に捉えて認識する。人は意識の中で、その空間を元に、それとは同様なまたは異なる多くの空間が[回想]によって、または[聴覚]によって蘇り、実際に捉えた空間と照らし合わせたり、積み重ねることでそれらが自然と繋がり、一つの「世界」を創り上げるのである。これは空間の意味を定義する一つの認識プロセスと言える。

建築空間に関して、実際に見ることや歴史を追うことだけでは明らかに出来ない心象的情緒的事実を、文学作品から見ることによって、現在存在しない当時の時代背景を踏まえた建築空間意識の構造、その認識までのプロセスが捉えられる。

1) 『フランス文学史』（著者：饗庭孝男他 株式会社白水社）

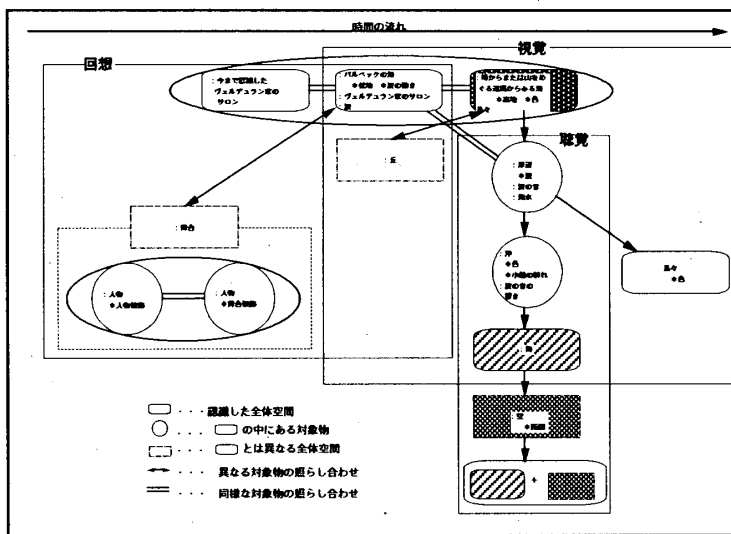


図6 空間の認識領域図

* 名古屋工業大学大学院博士前期課程
 ** 名古屋工業大学大学院博士後期課程・修士(工学)
 *** 名古屋工業大学教授・工学博士

Master's course, Nagoya Institute of Technology
 Dr.'course, Nagoya Institute of Technology, Master Eng.
 Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng